

函館市市街地及び近郊におけるコネズミガヤの繁茂

北斗市 長谷 昭

はじめに

コネズミガヤ *Muhlenbergia schreberi* J. F. Gmel. はイネ科ネズミガヤ属の外来植物で、原産地は北米大陸東部とされる。本種は 1929 年に横浜で採集されているが、報告は久内 (1950) が最初のものである (長田 1993)。関東地方の都市緑地を中心に、北は山形県まで分布しているとされる (勝山 2003、植村ほか 2015) が、岩手県での本種の分布も報告されている (鈴木 2015)。その国内分布から、本種は横浜港に陸揚げされた北米からの輸入品に混じって国内に侵入し、関東一円に分布を広げ、さらに北上しつつあると推定されるが、比較的稀な植物のようで、北海道での分布の報告はない。

筆者は、函館山に生育している維管束植物の全体像を探るために、函館山緑地に隣接する寺社境内及び墓地等でも植物調査を行ってきた。その過程で、山麓の標高 75m 付近に位置する神社の境内に群生する、ヌカボ *Agrostis clavata* Trin. var. *nukabo* Ohwi のような細長い線形の花序をもつ小型のイネ科植物を見つけた。この植物は、小穂中の小花は 1 個であるが、長い芒を持つことよりヌカボではなく、また、より幅広の円錐花序を持つネズミガヤ *M. japonica* Steud. と異なっていた。一方、ネズミガヤ属としての特徴を持つことより、長田 (1993) をもとにコネズミガヤと同定した。

この植物の分布状況を、最初に見つけた

神社周辺に広げて調査したところ、似たような環境にある近辺の寺院境内のみならず、道路脇の植樹柵内や建物の陰及び空き地等、随所での群生を確認した。さらに範囲を広げて調査したところ、この植物は、函館市の市街地のほぼ全域に渡って分布するとともに、函館市郊外や近隣の市町村にも幹線道路沿いに分布を広げていることが分かった。

本稿では、以上の調査結果をまとめ、函館市におけるコネズミガヤの由来について考察する。

コネズミガヤの同定

図 1 は、最初に見つけた函館山山麓の神社境内での植物の生育状態と花序及び小穂等の拡大を示したものである。桿の基

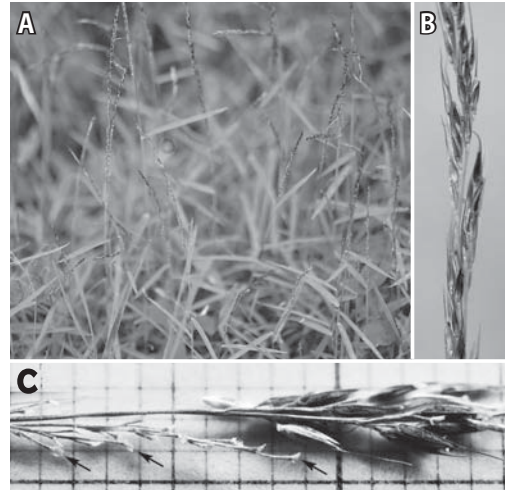


図 1 函館山山麓の神社境内に生育するコネズミガヤ A: 群落の一部、B: 穂の拡大、C: 1mm 方眼紙上での包穎及び小穂の拡大。小花がはずれた包穎の一部を矢印で示した。A、B は 2021 年 9 月 14 日撮影、C は乾燥標本を用いて撮影。